

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（一七）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（一五） 応永二三年～二七年（一四一六～二〇）『米沢史学』三〇～三四号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五四号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四六号（二〇一四～二〇一九年）

○現代語訳（一六） 応永二八年（一四二一）一月一日～四月三〇日まで。『米沢史学』三五号（二〇一九年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二八年五月一日から八月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭齊『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

御香宮で大般若経転読祈祷

（応永二十八年）五月一日、雨が降った。いつものように月始めのお祝いをした。御香宮で大般若経を略読させた。病気を治す祈祷のためである。病状が少し良くなったので、ありがたい。

二日、雨が降った。等持寺の法華八講がいつもの通り行われたようだ。

足利義持らに薬玉を贈る

四日、晴。室町殿へ薬玉を差しあげる件は、これまで清原常宗が取り次いでくれた。しかし当年は常宗が室町殿にお仕えしないので、裏松義資中納言に取り次いでもらうことにした。このことを裏松が了承したので、裏松を通して薬玉を贈った。広蓋ひろがたが手許にないので、柳箱に入れて送った。柳箱に入れて送るのは初めての事である。

室町殿の若君にも、御所女房を通して同じく薬玉を贈った。鳴滝殿御稚児にも贈った。その他は例年と同様である。

夜に薬玉の使者が帰ってきた。毎年変わらず薬玉を贈って下さるのはめでたく、またありがたいと、裏松から伏見宮様によくよくお伝えするよう、室町殿が仰っていたそうだ。若君御方からも御所女房を通して、同じようなお返事をいただいた。

いつものように今出川家から菖蒲根の枕などが進上されてきた。今出川公富新大納言の病状は少し良くなってきたそうだ。

五日、晴。「端午の節供で佳い時節である。たいへん幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように御節供のお祝いをした。いつもなら風呂に入るのだが、私は病気が全快していないので、あれこれ考えて入るのを止めた。

白朮散

医師の心知客が良い薬である人參びやうじゆのつゐんと白朮散を献上してくれた。

六日、晴。明日、祈禱のため、大般若經を略読する。それで、永円寺の僧たちを呼ぶことにした。寿蔵主が、この件の事務を取り扱う。

伏見宮家で大般若經を転読する

七日、晴。朝早く南面の四間に道場を設営した。屏風を立てて、それに本尊を懸けた。それは御香宮本尊の釈迦像で十六善神も描かれている。

もう一枚は永円寺の本尊である。都合二枚の本尊を懸けた。

巨勢金岡筆の不動明王画像

仏壇を立てて、供物や抹香とお花を置いた。本尊の左脇には不動明王の図を懸けた。これは巨勢金岡の筆によるもので、伏見宮家代々の守り本尊である。東面に青い御簾を懸けて、参列所とした。西面の縁に畳を三畳敷いた。その畳の後ろに屏風を立て、ここを侍臣たちの座る場所とした。

開始時刻の午前十一時に、僧たちが来た。永円寺長老以下九人の僧である。彼らはまず行蔵庵で軽食を摂ってから、宮家に来た。すぐに御経の略読が始まった。法要の唄ばいや花をまき散らすことも、いつもと同様であった。儀式は厳粛に行われた。略読して開かれたお経の巻物を宮家の男女が巻き直した。午後三時に大般若經略読の法会が終わり、僧たちが座から起った。私は御簾の内に居ながら、長老に会釈し、無事に終わりありがとうございますと言った。その後、酒宴があった。

私の病状は今日、とても良くなった。祈禱によって上・下の者たち皆が安穩になった。私の願いがすべてかなって、めでたいことである。

京の錦小路・油小路十六町が炎上する

聞くとところによると、今日の昼に錦小路と油小路の交差点付近の十六町が炎上したそうだ。

十三日、雨が降った。今日は朝廷から諸々の神社にお供えをしたそうだ。世尊寺行豊朝臣は、天皇の命により伏見稻荷大社にお供えを持って行った。このお供えは、全国的な飢饉や流行病に対するお祈りのためだという。

十四日、晴。用健が真乗寺殿のお使いとして、いらっしゃった。真乗寺住職のご病状は日に日に悪化しており、もう何も頼る術はない状況だ

という。

それで、法安寺田が住職一代限りの領地となっているが、今後ずっと住職の菩提を弔うために真乗寺へ寄付してほしいとのことだった。できれば永遠に真乗寺へ法安寺田をお与え下さいと申し入れてきた。住職のお手紙と次期住職の理明御房の手紙なども見せられた。首座を通して詳しいことが述べられていた。

このことは難問であり、他にやりくりがつかない。皆で議論した。

貞成の病気が治る

十五日、朝に小雨が降った。夕方、にわか雨が降り、雷が鳴った。

病気が治ったので、今日、沐浴した。病氣回復の祝宴をした。田向三位・

重有朝臣がお酒を献上してくれた。

十六日、昼にわか雨が降り、雷が鳴った。つむじ風が吹いた。このつむじ風のために、石井村や上立の小屋二軒が吹き破られた。また別の一軒は宇治川へ吹き流されたそう。不思議なことである。

用健が来た。ただいまは嵯峨の自分の寺にお戻りになっているそうだ。用健は真乗寺殿へのお返事をいただきと言ってきた。

真乗寺へは法安寺田半分をしばらく預け置く

保安寺田については守るべきことを書き記した崇光上皇の文書が残されている。それで保安寺田を永遠に真乗寺へ差し上げるとは難しいと返事した。ただし真乗寺住職の思いも見過ごせない、法安寺田の半分をしばらくの間だけお預けするつもりである。保安寺田全部というのは無理だと用健に話をした。

貞成の娘を真乗寺に入れる

ことのついでに、私の娘を生涯お弟子として真乗寺へ入れたいとも話した。理明御房へ詳しく伝えてもらうことにした。

さて近江国山前荘のことについて、後小松上皇様が冷泉永基へお話しされたそう。この件を私から室町殿へご推薦することに問題は無い。ただしうまく伝えられなければ元も子もない。ご機嫌をしつかりと伺ってからお話しするように」とのご命令だそう。このことについてはおおざりにしない」と後小松上皇様はきちんと約束なさったことを、永基朝臣が伝えてくれた。上皇様のお気持ちは、恐れ多くもありがたい事である。

今出川家で流行病患者が続出する

ところで、今出川公富新大納言の風邪は治ったけれども、まだ邪氣がありぼう然とした状態だそう。家司の三善興衡の遺産を相続する者もまだ病気が直っていないそう。興衡の嫡子である藤衡は病気で、命も危ぶまれているという。家中で病人が相次ぎ、今出川家そのものの安否も危うい。今出川公行前左大臣が慌てふためいているのも、しかたのないことだ。凶年のこととはいえども、この惨状にとっても驚き歎いている。

即成院の百万遍念仏

十八日、晴。今夜は即成院で百万遍念仏がある。寿蔵主が願主、善基が勧進聖となり、上・下皆々へ寄付を勧めている。これは、村人の多くが死に、あるいは病に苦しんでいるので、亡くなった方々への追善供養と今現在病んでいる人々のための祈祷だという。

念仏する者たちが二千人あまりも群れ集まったそう。宮家の女性たちや田向三位以下の者たちも参列しに行った。伏見荘村々の百万遍念仏は、このところ盛んになってきている。

足利義持、勧修寺家にいる小川宮を突然、訪問する

十九日、晴。今日、勧修寺家で養育している後小松上皇様次男の小川宮

御方を突然、室町殿がお訪ねになった。勧修寺経興朝臣はびっくり仰天したそう。小川宮が勧修寺家に来てから以後、室町殿は初めていらった。訪問の理由は分からないが、きっと吉事であろう。

今出川家青侍宗親が流行病で死ぬ

さて聞くとところによると、今出川家の侍である宗親が世間で流行している病気に罹り、今日死去したそう。とてもかわいそうなことだ。今出川家の使用人が病気で次第に減少しているのは、ただごとではない。

今出川公富の五歳の娘も死ぬ

二十二日、雨が降った。今出川公富新大納言の五歳の娘が、今朝死んだそう。父親の公富新大納言も下痢が再発して、重態だという。

今出川家一門が滅亡する時節になったのである。最悪の事態である。神様の思召し以外、頼みとするところはない。

二十七日、晴。来月二十三日に上皇御所で舞御覧がある。それに先立つてまず十八日には天皇陛下の上皇御所への行幸があるそう。このことについて、世間ではいろいろと推量しているよう。全国的に病死する人が続出している折節、出仕するのが困難な人も多いだろう。舞御覧の事務担当者は、坊城俊国右少弁だそう。

二十八日、晴。冷泉正永が来て、世間話をしてくれた。京都市内では病死する人たちがますます増えており、非常事態になっているそう。

後小松上皇の夢想

最近、上皇様が不思議な夢をご覧になったという。相国寺の門前に牛が千頭ばかり群れ集まり、門内に入ろうとしている。ところが門番がこれを食べ止め、牛たちを追いつめた。先頭を歩いている牛が声を発して「ここは、誠に座禅を組む場所だ。入ってはいけない」と言っ

たそう。それで牛たちは散り散りになって京都市内に乱入した。その夢の中で人が「この牛たちこそ疫神だ」と言ったという。そして上皇様の夢は覚めたらしい。

室町殿が上皇御所へ行かれた折に、上皇様がこの夢のことをお話しになった。それですぐに室町殿は相国寺へお入りになり、法会の座につくよう、僧たちにお命じになった。それで僧たちは勤行をしたそう。不思議な御夢である。

春日大社の怪異

奈良の春日大社で怪異があった。社頭で鹿が倒れ変死して、血を流していたそう。

出雲国林木荘

さて用健の御領地の件で、真乗寺塔頭の宝寿院に連絡を入れた。室町院領出雲国林木荘など二箇所について契約するよう、話をした。

春日大社の託宣

【頭書】春日大社の御託宣。人民は死亡し、火事や兵乱があるだろうとの神託があったそう。

二十九日、晴。毎月恒例の連歌会を、長資朝臣と正永の二人が当番幹事として準備してくれた。いつものようにまず一献の酒宴をした。椎野・田向三位以下、いつもの参加者であった。夕方に百韻を詠み終わった。

愛染明王堂で焼香する

六月一日、晴れていたが、昼にわか雨が降った。朝早く愛染明王堂に行き、焼香してきた。

さて玉寿丸が出家してから、まだ挨拶に来ていない。それで今日、一献の酒を持参して来たので、対面した。扇を与えたら、すぐに退出していった。その後、酒を飲んだ。田向三位以下、正永が一緒だった。

二日、晴。祐譽僧都が小一献の酒を持参して来た。対面して、数時間、雑談した。明日、仁和寺御室御所へ室町殿がいらっしゃるそう。お土産に銭五十貫文をご持参するらしい。御会所でお会いしたいと御室御所が室町殿を招待したという。

六日、晴。聞くところによると、仙洞御所女房の二位殿日野西資子殿が流行病に罹ったので、実家に帰ったそう。それで天皇陛下の上皇御所への行幸は中止になったようだ。

さて今出川家家中の病気感染はまだ続いている。今出川公行前左大臣の妻である近衛局も病気だし、同じく前左大臣の娘も病気だそう。

今出川家家司の三善家は流行病でほぼ全滅

家司の三善藤衡も先月晦日に死去した。三善は兄弟共に死んでしまった。三善家の者たち大半が病死している。出家している女性四、五人が残っているだけだ。今出川家の政所役として家政に携わる三善家は、すでにほぼ全滅状態となっている。言葉に尽くせないほど悲惨な状態である。

今出川公富新大納言も同様に重態だそう。今出川家が今後も続くかどうか、この時に懸かっている。神様の思し召しは、どのようなものであろうか。ただごとではない。しかし今のところ、今出川実富大納言は無事である。息子たちも問題ないらしい。

さて唐橋在豊朝臣から書状が届いた。九条満教関白が来たる十二日に室町殿を自宅へお招きするそう。それで伏見の川魚を望まれているという。村人に川魚をとるように命じておくと、返事をしておいた。

四角四境祭も流行病に効果なし

【頭書】先日、陰陽師による四角四境祭（※）が行われた。しかしそれでも流行病は治まりそうもない。

※四角四境祭（しかくしきようさい）：疫神の災厄をはらうために、家や地域などの四方の境で行った陰陽道の祭祀。

祇園会見物の村人等口論による殺人

七日、晴。京都の祇園祭が型通りに執行された。伏見荘の村人たちも見物に出かけて、ひどく酔ったそう。帰り道の松原で、村人同士が口論となり、一人が刺し殺されてしまった。死んだのは大光明寺の雑用人だという。殺したのは静隠庵の雑用人に、すぐに逃げ出したそう。

犯人の家を検封する

大光明寺から法に則って処罰してほしいと申し入れがあった。それで犯人自身は逃亡しているので、その家を差し押さえた。

宮家の祇園会内祭は無事に終わった。その後、皆で囲碁を打った。

今出川家は既に滅亡状態

十一日、晴。今出川家のその後の様子が心配なので、行光を使者として派遣した。帰ってきた行光が言うことには、今出川公行前左大臣も病気になるが、さほどひどい状態ではないそう。返事はだいたい公行本人から聞くことができたという。公富大納言も同様の状態だという。公富の嫁は故東坊城長頼の娘であるが、亡くなったそう。家司の重徳は二日からこの病となり、とても重態だそう。

政所役の三善家では残る十七人が死去したという。三善興衡の末子である幼児一人だけが残されたらしい。

今出川家は既に滅亡状態と言えようか。言葉に言い表せないほど悲惨な状況である。前左大臣が完治するのを祈るのみである。

足利義持、九条満教邸を訪問する

十二日、晴。九条満教関白の屋敷に室町殿がお入りになったそう。お供として、日野有光卿・烏丸豊光卿・裏松義資卿・勧修寺経興朝臣ら

も行ったそう。先日、打診があつた川魚を九条家へ送つておいた。

四絃灌頂の奥書

さて今出川前左大臣が病氣である。それなのに、私はまだ前左大臣から琵琶の秘曲を伝授されてない。せめて秘曲伝授の証書だけでもまず発行してもらえないかと、庭田重有朝臣を通して申請してみた。綾小路信俊前参議とも相談してほしいとも言ひ含めた。

秘曲伝授以前に奥書を発給する先例を知らず

夕方、重有朝臣が帰つてきて言うことには、まず綾小路前参議と相談したところ、秘曲が伝授される以前に証書を書き与えるような先例を知らないと綾小路は言つたそう。しかし重有朝臣は、琵琶の道が全く断絶するよりは、せめてこのようになさつた方がいいのではないかと反論したそう。

次に今出川家へ向かつたところ、取り次ぎ役の者が誰もいない。ちょうど今出川家の侍と出会つたので、詳しいことを話して取り次いでもらった。

しばらく時間が経つてから、返事があつた。「御証書を差し上げることに問題はありません。只今すぐにでも書いて差し上げたいのですが、あいにく書記役の者がおりません。もし手助けしてくれる者が見つかりましたら、必ず書いて差し上げます」とのことだった。

前左大臣の意識はさほど悪い状態ではないようで、返事もだいたいご自身でなさつたようだ。ただ病状は相変わらずで、全快する見通しはたつていないという話だった。

今出川家はほぼ全滅

今出川家の様子だが、前左大臣の妻である近衛局は少し回復したそう。冷泉局は去る四月に母親が亡くなったので、実家に退出したままで、まだ今出川家には帰っていないという。今出川家にはほとんど人が居らず、左大臣の娘である慈雲院沙弥がただ一人で看病しているようだ。

重徳の病状も変わらず、生死の境をさまよっている。政所役三善の遺族男女十六、七人は死去した。今出川家の侍である宗親も死んでしまひ、子どもは一人もいないらしい。

今出川家はほぼ滅亡ですと今出川家の侍は詳しく話してくれたそう。

何よりも琵琶の秘曲伝授が断絶するのは、日本国としても特別嘆かわしく思う。私に才能がないことや忙しのために、今までほつたらかして秘曲を伝授しなかつたのは、後悔してもしきれない。

聞くところによると、正親町実秀中納言は今日、大納言に任命されたそう。

今出川公行の死

十四日、晴。今出川家より召使いが走つて来て言うことには、昨夜午前三時に今出川公行前左大臣が亡くなったそう。もしかしたらとは思つていたが、戸惑ひ、とても驚いた。

使者が続けて語るところによると、今出川公富新大納言はなんとか生きのびているので、昨日上皇様から内々に今出川家相続の承認書が下されたという。また上皇様はご助成金十貫文も下さつたそう。

およそ今出川家の家中と家僕あわせて二十八人が死去したという。前代未聞のことだ。

琵琶秘曲伝授が断絶する

例の琵琶秘曲伝授の証書は結局、書いてもらえなかつた。秘曲伝授が断絶するのは、いくら歎いてもあまりあることだ。園基秀中納言もまだ伝授されていない。藤原孝長は伝授されたと自称しているが、何の証拠もないので、怪しいものである。日本全国既に琵琶の道が断絶してしまふのか。言葉にできないほど、ひどい事である。

私は今出川家に長年同居していた。いろんなことで今出川家を頼りにしていたので、とてもがっかりしている。嘆き悲しむこと、なかなか言

葉には言い表せないほどである。

さて祇園会の見物に關して、室町殿の見物席を細川満元管領が用意したそう。

宮家での祇園内祭も皆が準備してくれた。その後、酒を飲んだ。

光台寺の風呂

十五日、晴れていたが、昼にわか雨が降った。光台寺の風呂に入った。沐浴した後、酒宴があった。思いがけないもてなしである。田向三位・重有・長資朝臣以下が参加した。三献が終わってから、帰った。

大光明寺大施餓鬼会

さて今日の夕方、大光明寺で大施餓鬼会が行われる。これは死亡した人民への追善のためだそう。京都の五山以下の寺々でも施餓鬼がある。それで大光明寺でも急遽、執り行うことになったという。この施餓鬼会のため、伏見荘の家々に寄付を求めているそう。

十六日、曇っていたが、夜には大雨となり雷が鳴った。このところ連日、日柄が悪いので、まだ亡くなった今出川前左大臣のお見舞いをしていない。

今出川公行の火葬

それです内々に今出川家の状況を聞いてみた。昨日、嵯峨の三統院の僧たちが来て、前左大臣の遺体を寺に運んだそう。三善興衡朝臣の末子である幸光丸と田村入道が寺までお供したという。それで昨夜、火葬したそう。この世が無常であることを、今更ながら肝に銘じた。とても悲しい。

今出川公富新大納言は少し回復したそう。その他の病人も特に変わったことはないという。

上皇様や妻の二位殿も流行病のため大事をとって、天皇陛下の行幸を来月に延期したという。

十七日、昼にわか雨が降り、雷が鳴った。落雷でとても震動して、肝を

つぶした。

即成院の百万遍念仏

十八日、晴。今夜は即成院で百万遍念仏があった。広時がそのための寄付を集めたという。宮家の女性たちや田向三位以下が参列しに行った。大勢が群れ集まったそう。

十九日、晴。今出川公行前左大臣の初七日である。身を浄めて、お経を読み、公行に回向した。田向三位が使者として、今出川家をお見舞いした。田向はすぐに帰ってきて、今出川家の相続について語った。今出川家では、田村入道が取り次いでくれたそう。

今出川公富新大納言は、今日病後はじめて沐浴した。次第に回復しているようだ。家司の重徳はまだ病状が落ち着かない。

今出川公行の讓状

公富新大納言に対する今出川家の讓状は、故前左大臣が病気になる以前に書いておかれたものだという。ただ清書されてはいないけれども、病中で公行はこれを公富にお渡しになったそう。これによって、上皇様が内々に相続承認の命令書を出しになったよう。今出川家領がいささか混乱しているという噂があるという。

日野資教一位禪門・日野西資国大納言入道・土御門資家卿が、先だって信濃国へ行き、善光寺に参詣した。このことをめぐって、いろいろと噂が流れているそう。国母の二位殿日野西資子殿が病氣なので、飛脚を信濃国へ送って、京都へ戻ってくるよう、室町殿がお命じになったという。

西園寺実光の失脚

また聞いたところによると、西園寺実光中納言が朝廷と上皇御所の宿直役当番を命じられた。しかしあれこれと言って宿直役を拒んだので、上皇様が室町殿へ訴えなされた。実光は、去る五月の等持寺八講に出仕した時も、失態を犯して、室町殿によってすぐに等持寺から追い出され

た。そして、その後、実光の領地はことごとく没収されて、生活の術を失った。

文机談

さて文机談という琵琶の相伝書に附属している注釈書を見た。

人にも許されて、人の師をも務むる程の人は、かえすがえすも有り難いものである。秘曲は、人の御師匠方のようなところへ伝えていかなければ、とてもではないが続いていけないことである。真言灌頂大阿闍梨秘曲を伝授された大人物や大きな寺の長老。これら程の人のことは、縁があつて人が推薦すれば、伝授は可能である。また人から侮られやすいことなので、なぜか思うようにはならないこともあるだろう。

今出川公行は器量が足りなかったか

このことをよく考えてみるに、今出川前左大臣は人の師匠として秘曲を伝授すべきものである。ところが前左大臣の人としての器量が足りなかったせいであろうか、自分の子どもにも他人にも伝授しなかった。これにより琵琶の道が断絶するのはしかたないことである。ああ、日本全国で琵琶の深い秘密が、この時点で断絶してしまった。歎いてもあまりあることだ。妙音天の思し召しはいかばかりのものか、計りがたいことである。

今出川実富が近衛局大將兼任を希望する

さて聞くとところによると、今出川実富大納言は、上皇様に和歌を送つて近衛大將を兼任したいと申し出たそうだ。このことを世の人々が嘲笑い、最近では噂にもなっているそうだ。その和歌はどういうものか、聞いていないのでよく分からない。

今出川家における自分自身の進退も定まっておらず、また只今は今出川家そのものの安否もはっきりしない時節に、このように大將の兼任を望むというのは、とてもおかしいことである。もしかしたら実富は気が

狂っているのかもしれない。

妻・庭田幸子の着帯の儀

二十五日、晴。私の妻二条局が安産祈願の着帯をして、そのお祝いをする事になった。数日前、陰陽師の賀茂在方朝臣にどの日にお祝いをしたらいいか、占わせた。それで今日が吉日だということで、お祝いをする事になった。

智恩院隆秀僧正が帯に対して祈禱をした。いつものように佳い例に従つて、お祝いをした。芝殿が帯を着ける役をした。

内裏女房の今参も流行病に罹る

二十六日、晴。聞くとところによると、鴨資有朝臣の娘である朝廷の女房今参は、例の流行病に罹つたので、内裏から実家へ退出したそうだ。今参は称光天皇陛下がご寵愛している人である。

天皇の母である日野西資子殿の病氣もいまだに回復していないという。それで、天皇陛下の上皇御所への行幸も八月に延期となったそうだ。

重有朝臣・寿藏主と宮家の女官たちは桜谷へ参詣しに行った。

今出川公富の病状

二十七日、晴。今出川公富新大納言の病氣は治ったけれども、食欲不振が全く収まらないので、体力が落ちたままだそうだ。魚を食べるよう医師が勧めているという。亡くなった父・今出川公行の服喪期間中だといっても、魚食を断つて身を淨めている場合ではない。今出川家が川魚が欲しいというので、鯉などを送つてやった。

今出川家家司の重徳も全快したそうだ。その他の病人たちも重篤な状態ではない。今となってようやく病勢が収まったきたようだ。

今出川家冷泉局の進退

今出川家の冷泉局も去る四月からずっと実家に退出したままで、今も今出川家には戻っていない。冷泉局は病氣だと言っているそうだ。もしかししたら、長年今出川家に奉仕してきたので、これをきっかけに冷泉局

は引退しようと思っているのかもしれない。どんなものだろうか。冷泉局は私と親しくしてきたので、この事はなおさら思いがけない事態である。

今日、上皇御所で田楽があつた。室町殿が上皇御所へ出向かれて、田楽の用意をなさったとのことである。

二十九日、晴。豊原郷秋が来た。郷秋は今出川家のことを見舞ってくれた。それで、彼と対面した。音楽会は今出川公行没後二十一日までは控えることにしている。

さて琵琶の秘曲を伝授されていないが、とりあえず秘曲伝授の証明書だけを受け取るというのはいかがなものだろうか、郷秋に聞いてみた。そうしたら、実際の秘曲伝授と証明書がともに伝えられなければ意味がないという返事だった。どちらか一方だけを伝えられても伝授とは言えないし、そのような先例も聞いたことがないという。なるほどと納得した。

採桑老秘曲の舞は既に断絶した

ところで、多久乙父子三人が死去し、採桑老の秘曲は既に断絶している。久乙の流派の他に採桑老の秘曲を伝えている人は誰もいない。久乙の末子で四〜五歳の幼児がいるが、舞は伝授されていないそうだ。

採桑老の秘曲の舞が断絶して、朝廷としても不自由しているというのは、残念なことである。諸々の芸道が途絶えていく時節が到来したのであろうか。

三十日、晴れていたが、時々小雨が降った。いつものように風呂に入った。六月祓の茅輪を用意する役を近年は綾小路信俊前参議がしていた。しかし彼は今日、宮家に来ていない。それで田向三位に初めて茅輪を用意させた。そして、いつものようにお祝いをした。

七月一日、雨が降った。「秋の初めの佳い時節である。とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。来たる五日は、大臣を任命する儀式が予定されている。

る。それに連動して、田向三位は参議に任命されることを望んでいるようだ。彼は京へ出かけていった。

二日、晴。退蔵庵主が来た。今出川公行前参議のことは見舞ってくれた。そして団扇を献上してきた。

後小松上皇が秘曲伝授について下問する

四日、晴。後小松上皇様から書状が下された。琵琶の秘曲を私が伝授したのかどうか。また今出川実富・公富両大納言は、どの秘曲まで伝授したのか。また園基秀中納言や藤原孝長らのことなど、いろいろと詳しくお尋ねにいられた。

それに対して、次のようにお答えした。まず私は最後まで秘曲の伝授を受けることができなかった。ただ三曲までしか伝授されていないことをありのままにお伝えした。面目ないが、しかたのないことである。今出川実富大納言は万秋楽まで伝授された。今出川公富新大納言は楊真操までは伝授されたようだ。園基秀中納言と藤原孝長朝臣も最後まで伝授されなかったように聞き及んでいる。ただし孝長朝臣のことははっきりとは判らない。以上のように、上皇様へお答えした次第である。

また近江国山前荘の件について、室町殿へ差しあげる書状を書いたら、上皇様から御推薦状を添えてくださるとの仰せであった。上皇様のご厚意は恐れ多く、うれしいことである。どのように書状を書いたらよいか、上皇様へ打診した。

大光明寺の風呂に入った。田向三位・重有・長資ら朝臣・寿蔵主を連れて行つた。その後、指月庵でしばらく休息をとった。五種類の軽食などを大光明寺が献上してくれたので、指月庵で味わった。

五日、夜明けには雨が降っていたが、朝には止んだ。今日は大臣の任命式だそうだ。長資朝臣が警備責任者として出席する。

庭田重有の息子が法性寺親信の養子となる

ところで重有朝臣には、慶寿丸の弟で四歳になる息子がいる。この子

が今日(※)、法性寺親信三位の養子になるそうだと。ある人がこの縁を取り持ってくれたそうだと。

※「今日」：原文では「今日有時」とあるが、「有時」の意味は不明。

六日、晴。長資朝臣が帰ってきた。大臣任命式の実施責任者は正親町三条公雅大納言で、次席責任者の公卿は某権大納言・久我清通中納言・万里小路時房中納言・中御門宣輔参議・町藤光参議。少納言役は高辻長広朝臣、弁役は坊城俊国、警備責任者、左は四条隆夏朝臣・冷泉為之朝臣、右は長資朝臣。事務担当は藏人頭の葉室宗豊だったそうだと。

今回昇進した人々は、内大臣に一条兼良、権大納言に日野有光、権中納言に清閑寺家俊・武者小路隆光・大炊御門信宗、参議に盛光、藏人頭に葉室宗豊だという。

綾小路信俊・田向経良、昇進・就任から漏れる

ところで、綾小路信俊前参議が中納言に昇進することを一生懸命働きかけたので、上皇様のお許しがでたそうだと。ところが、今回は昇任を見送られた。あまりに激しく昇進を働きかけたことがかえって上皇様のご機嫌を損ねたそうだと。

田向経良が参議になることもお許しがあつたように、数日前耳にした。しかし結局、彼の参議就任はなかった。

二人が昇進や就任から漏れたのは不運なことで、かわいそうなことだ。

七日、雨が降った。朝早くいつものように七夕の梶の葉の奉納をおこなった。

さて今出川公行左大臣が亡くなったことで、数日前に七夕への草花奉納をとりやめることにした。ところが、前から花奉納に参加していた人々から、少々生花と花瓶が献上されてきた。そのため急遽、座敷などを整えた。それで、花瓶十五個を立てた。

花を進上してきた人々は、田向三位・重有朝臣・長資朝臣・法安寺・

光台寺・玄忠房・行光・土倉の宝泉らである。毎年、花を進上することを佳い先例としていたので、特に献上したということだった。

大光明寺へお参りした。今日が光厳上皇の祥月命日なので、焼香に行つたのである。その後、地藏殿で長老と対面し、すぐに帰った。そして風呂に入つて、いつものように御節供のお祝いをした。

上皇御所での御花合わせや音楽会はいつものように行われたそうだと。上皇様の次男である二宮殿もいらつしたようだと。二宮殿は昨日、寄留先の勧修寺家から上皇御所へお入りになつたという。

十日、晴。花瓶を撤去して、進上してきた面々に返却した。

重有朝臣が京へ出かけた。近江国山前荘に関して室町殿へお送りする書状の草案などを冷泉永基朝臣に見せて相談するため、使者として出かけたのである。永基は草案などを拝見して、私としては判断しがたいと言つたそうだと。まずは永基から草案を上皇様へお目にかけて、その御指南に従つて宮家へご返事しようと言案したという。

また綾小路信俊前参議に秘曲伝授の件で相談した。重有朝臣に、上皇様からの下問に対する私の返答の内容を、綾小路へ詳しく説明させた。秘曲をすべて伝授されなかったことに対する上皇様のご心配や綾小路自身の怠慢の至りであり、綾小路も無念に思つていることなどを、いろいろと語つて下さつた(※)そうだと。

この奥秘が日本においてすでに断絶したのは無念なことであると、いろいろな人が歎いているそうだと。しかたのない次第である。口惜しいと言ふ以外のなものでもない。

さて上皇御所での七夕音楽会で、甘州只拍子の秘説などについて上皇様が議論なさつたそうだと。なお綾小路前参議は音楽会に欠席したという。上皇様は綾小路に対してご不快に思つていらつしゃるので、綾小路をお呼びにならなかつたようだと。

今夜、即成院で百万遍念仏があつた。

※「語って下さった」：原文は「仰せられる」。目下の綾小路に対して敬語を使っているのは、綾小路が貞成にとって雅楽の師匠だからであろう。

伊勢神宮の神歌

十一日、晴。伊勢神宮の宮人が一人、やって来た。去る六月七日に伊勢神宮で御託宣があったという。一昨年蒙古が攻めてきた時、伊勢神宮の神様が退治したことにより、異国の賊徒が大勢滅亡した。その怨霊が疫病を引き起こし、とても多くの人々が死亡するだろうとのことだ。神が詠んだという歌が四首あるそうだ。このようなことを大げさに話すので、信仰するには及ばない。しかし、その神歌というものを記録しておく。

千早振る 神も居墻は 越えぬべし

向かう箭先に 悪魔来たらず

千早振る 神の前なる 流鏑馬（脱字あるか）

引くとはみれど 放つ箭もなし

風吹くと 梢動かし 花散らし

荒ぶる神の あらん限りは

千早振る 神の敷地に 松植えて

松もろともに 我も栄えん

十三日、晴。故今出川公行左大臣の没後三十五日が来たる十七日に当たる。それで、時間をかけて書写した法華経一部・錢三貫文のお布施・お茶十袋を子の今出川公富新大納言に送った。形ばかりの気持ちを表した。

十四日、晴。いつものように盂蘭盆経を読んだ。生島明盛が来た。病気が治ってから、初めての事である。

十五日、晴。いつものように蓮飯を供えた。その後、大光明寺の施餓鬼会に参列した。東御方・廊御方・兄の未亡人である上臈・私の妻である二条殿、それに田向三位・重有朝臣らも参列した。その後、先祖の御廟に行き、水を手向けてから帰った。

石井村の念仏拍物行列による風流芸

今夜、石井村の念仏囃子物行列が宮家に来て、物真似芸を披露した。茶屋を建てて、そのなかにお稚児さんの人形が鉦を叩いて男と恋愛の約束をしている。その人形を操って、鉦を打ちながら舞を舞わせた。その他、風変わりな物真似芸がいろいろとなされた。御簾の内側から、それを見物した。舟津でも同じように物真似芸が行われたそうだ。

十七日、雨が降った。今日は故今出川公行左大臣の没後三十五日なので、お経を読んだ。田向三位が京へ出かけた。

十八日、晴。田向三位が京から帰ってきて、世間話を語った。室町殿への八朔進物の件、去年と同様に今年も禁止なさるのかどうか、清原常宗に尋ねた。今のところ、そのようなご命令はないという。

去年の八朔禁止は不吉な事であったといろんな人が言っているそうだ。しかし今のところ、室町殿が八朔を禁止するという仰せは出されていない。

天皇陛下の上皇御所行幸は来月十三日になったそうだ。

十九日、大雨が降り、洪水となった。

さて故今出川公行左大臣没後三十日間は音楽会をやらないことに決めていた。今日、その期間が過ぎたので、琵琶を弾いた。万秋楽の秘曲を妙音天に奉納した。

二十日、晴。朝早く伏見宮御所の旧跡に行つて、洪水の様子を眺めてみた。東津で舟に乗った。重有・長資朝臣・慶寿丸を連れて行つた。一時間ほど乗船した。

田向経良、参議となる

さて田向経良三位が今日、参議に任命された。任命書作成担当の公卿は万里小路時房卿、事務担当者は坊城俊国である。任命書がすぐに届けられた。めでたいことである。この任命は、正親町三条公雅大納言の取り次ぎによるものである。

今回の参議就任により、石清水八幡宮放生会に参列するよう、朝廷から経良に命令が下された。数日前、参議就任を申請した時、陛下のお許しがあれば放生会に参列したいと申し入れていたそうだった。

長年不遇を歎いていたが、数人を飛び越えて突然昇進した。その喜びようはもつともなことで、察するにあまりある。めでたいことだ。

検非違使別当の勧修寺経興も中納言になったそうだった。これも命令によるものである。

一方、綾小路信俊前参議の中納言昇進は、今もってお許しが出ていない。田向と同じ綾小路一門のなかで、憂いと喜びが相半ばしたようなものだ。

称名院における月庭の法華經説法

二十三日、晴れていたが、夕方、にわか雨が降った。学問僧の月庭和尚が来た。彼は去年、法安寺で法華經の講演をした。月庭は軽食などを持参してきた。思いがけない芳志である。対面して、話をした。今日から称名院に滞在して、法華經について講演するそうだった。「本日の第一回目から特にご聴聞に来ていただければ、幸いです」と誘ってきた。

「ただ場所が小さな寺庵なので差し障りがあるかもしれない」と返答した。そうしたら、「仏教の教えを聞くのに身分の上下差別は関係ありません。仏法はどなたにも平等で、身分の上下は関係ありません。ですから、まげてご聴聞下さい」などという言ってきた。とりあえずは聴聞すると返答しておいた。

ところが今回の講演は願主が土倉の宝泉だという。その講演に臨席すれば、どのような批判を受けるか判らないので、遠慮したい気持ちは山々である。ただし父・大通院の時代に称名院で仏法の講演を聴聞されたことがあるそうだった。そのような先例があるからには、仏法の教えを聞いてみたい志は少なからずある。いろいろな批判を顧みず、聴聞してみようと思った。

東御方・廊御方・山田真幸房・田向経良新参議・重有・長資朝臣・寿藏主を連れて行った。聴聞席は新築されていた。宮家の女性たちが聴聞するので、新築したそうだった。その心持ちは神妙である。聴衆には、僧たちが大勢集まっていた。

今日はまず第一巻の題名に関してだけ説法があった。二時間ほどして宮家に戻った。私たちにはささやかなお弁当がだされた。要らぬ気遣いである。

二十四日、晴。昨日同様、月庭の法華經説法を聞いた。宮家の女性たちや男どもも同様だった。夜にもまた説法があつて、みんな聴きに行った。私は行かなかった。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会、今日は私が当番の幹事である。参加者はいつもと同じ。先月は、今出川公行左大臣死去のことがあつて、中止した。

今夜もまた、宮家の女性たちや男どもは月庭の法華經説法を聞きに行った。

二十七日、晴れていたが、夕方、にわか雨が降った。月庭の法華經説法を聞きに行った。田向経良新参議・重有・長資朝臣・寿藏主も一緒に聞きに行った。宮家の女性たちは来なかった。聴聞が終わってから、風呂に入った。

二十八日、晴。故今出川左大臣の四十九日法要を繰り上げて行った。

月庭がお経を読んだり説法するのを聞きに行った。重有朝臣も来た。宮家の女性たちは夜、聞きに行った。

二十九日（※）晴。八月朔日贈答の準備にかかりつきりだった。

室町殿への御贈答は、去年から遠慮するようにとのご命令が出されている。ただし特に選ばれた人々は進物を差し上げている。当年も、去年と同じようになるらしい。

私のような取るに足らない者は、特に選ばれる人々のうちには入らな

い。それが今更ながら残念である。ただし仁和寺御室御所ならびに山門の三門跡以外の諸門跡寺院や皇族、それに大臣以下の諸家も皆、贈答を差し止められている。それら一同が皆、差し止められているのでは、しかたのないことだ。室町殿の若君に対する贈答も、同様に差し止められている。

夜にまた月庭の説法を聞きに行った。宮家の女性たちや重有朝臣以下の者たちを連れて行った。帰ってから、廊御方のお部屋で酒を飲んだ。

※「二十九日」：原文では「三十日」とある。

八月一日、日蝕は午後三時から七時までと予測されていた。しかし、空が曇っていて、日蝕は見えなかった。御祈りの効き目があったのだろうか。

朝早く、後小松上皇様へ御贈答品を差し上げた。お贈りしたのは、磁器の大鉢一つ、磁器の花瓶一つ、それに引合紙三十帖である。いつものように冷泉永基に取り次いでもらい、進上した。天皇陛下に対する御贈答品も同様である。

田向経良新参議が一献の酒を進上した。それを飲んで、月始めのお祝いをした。

外様の家司からも八朔進物がなく、寂しい

宮家外様の家司たちからの進物は遅れていて、宮家に冷やかな空気が流れた。今出川家など数家からの進物もない。それで、いよいよ寂しい感じになってしまった。

夜に入って、京都から使者が戻ってきた。上皇様のお返事は、後に改めていただけることだった。私が贈った花瓶や大鉢を上皇御所に仕える者たちが褒めていたらしい。永基はそうのように言っていたそうだ。うれしいことである。

夜にまた、月庭の説法を宮家の女性たちや男どもが聞きに行った。

二日、晴。廊御方の二日御贈答で、いつものように一献の酒宴をした。

三日、晴。相応院殿に贈答品を進上した。そうしたら、それに先立って相

応院殿から贈答品を頂いた。ありがたいことだ。祐誉僧都からも同じく贈答品の献上があった。勧修寺経興中納言や冷泉永基からも今日、贈答があった。

また月庭の説法を聞きに行った。宮家の女性たちや田向経良新参議以下も同行した。今日は法華経信解品の説法で、素晴らしかった。夜にもまた聞きに行った。宮家の女性たちや男どもも同じである。聴講したい気持ちがあるので、二度に渡って聞きに行った。

四日、晴。正親町三条公雅大納言からは永年八月朔日の進物が来ていたが、室町殿への進物が去年から禁止されたためか、去年から贈られてこない。もしかしたら別の機会を待っているのだろうか、不審である。贈答がないのは残念なことなので、今年はこちらから贈り物をした。お祝いを兼ねてのことである。勾当局藤原能子殿からの進物は、今日届いた。椎野寺主が来た。

五日、小雨が降った。正親町三条公雅大納言が昨日のお返事とお返し之宝などを進上してきた。「当年こそはお贈りしようと思っていたのですが、幕府への出仕などで忙しく遅れてしまいました。ところが先立ってお贈り下さり、恐れ多くもうれしく存じました」と言ってきた。

月庭の説法を聞きに行った。椎野寺主・宮家の女性たち・重有朝臣も同じく行った。その後、少し酒を飲んだ。

六日、晴。方々からのお返し品を、宮家の者たちに分け与えた。

ところで明日、室町殿が退蔵庵へいらっしゃるといふ。さきごろ寺の領地支配を保証してもらったので、そのお礼にお招きしたそうだ。大光明寺へも同じくお立ち寄りになるという。

足利義持が退蔵庵に来る

七日、晴。朝早く室町殿が退蔵庵へお入りになった。お供の者たちは、細川義之・讃岐守の息子・畠山持幸・右馬助・伊勢貞経・伊勢守の三人だそうだ。退蔵庵で軽食をお摂りになったあと、蔵光庵へお入りになった。そこで

御舍利をご覧になった。その後、大光明寺でお食事なされ、すぐにお帰りになったそう。室町殿とご一緒だったのは、鹿苑院主・宗寿院主・大光明寺長老・室町殿の弟で退蔵庵主の隆侍者らであった。

夕方、退蔵庵・蔵光庵・指月庵などを見て回った。退蔵庵庭園の池の飾りとして、新しく池橋がきれいに造られていた。椎野寺主・田向経良新参議・重有・長資朝臣・寿蔵主を連れて行った。

八日、晴。今日も月庭の説法を聞きに行った。宮家の女性たち・田向経良参議以下の者たち、惣得庵主・山田香雲庵主らも同じく聞きに来た。

即成院百万遍念仏

さて来たる十二日は故庭田重資大納言の三十三回忌である。その仏事として、今夜、即成院で百万遍念仏があった。田向経良新参議の発願だったので、お忍びで聞きに行った。椎野寺主・宮家の女性たちや男どもも皆来ていた。ちょっとしたお弁当も出た。

毎月の当番を決めて、怠ることなく百万遍念仏をしているそう。私は初めてこれを聞いた。素晴らしかったので、私も百万遍念仏を信仰することにした。

今出川公富の死

九日、曇。このところ、今出川公富新大納言の病気がとても悪化していると聞いた。それで重有朝臣を病氣見舞の使者として今出川家に派遣した。公富にいろいろと伝えたいことがあったのである。重有朝臣は夕方、戻ってきた。

それによると、公富新大納言は今日、亡くなったという。なんとも言葉に言い表すことができない。言葉にしたところで、かえってどうしようもないことだ。

今出川家は滅亡か

これで今出川公行前左大臣の子孫は、もはや断絶してしまった。今出川家はすでに滅亡したというべきであろう。実富本大納言は生き残って

はいるものの、天皇家からも將軍家からも疎んじられているので、今出川家を相続できるかどうか、心許ない。今出川家先祖代々の思いはいかばかりであろうか。

冷泉正永が来て、世間話を話してくれた。

十日、雨が降った。月庭の説法を聞きに行った。田向参議以下の者たちと冷泉正永等も同じく聞きに来た。宮家の女性たちは来なかった。

月庭、法華経見宝塔品を説く

十一日、晴。今日の月庭の説法は、法華経見宝塔品の論議である。この見宝塔品を説くときは、花を供養するそう。それで説法の道場に花を飾った。草花の花瓶が三十あまり立てられた。それにお盆や香箱以下、いろいろな中国製品が置かれた。仏壇には金襴緞子の幕を引いた。座敷の飾りは照り輝くばかりだった。

玉阿の唐絵

また客殿には屏風を立て廻し、それに玉阿が書いた中国風の絵を懸けた。屏風の前にも花瓶をいくつか立てた。座敷飾りは、奇麗さ極まりなかった。私は花瓶を二つ提供した。椎野寺主・田向新参議・重有・長資ら朝臣はそれぞれ花瓶を一つずつ提供した。

早速、説法を聞きに行った。椎野・東御方・廊御方・経良の妻である芝殿・塔頭御寮恵芳・田向新参議・重有朝臣・長資朝臣・冷泉正永・寿蔵主・稚児の聖乗・惣得庵主・山田香雲庵主ら、大勢が来ていた。僧侶や俗人、身分の高い者も低い者も、大勢群れ集まって、説法の様子を見ていた。

説法がはじまる前に軽く一献の酒宴があった。その後、説法が数時間行われた。説法が終わって、宮家へ帰った。

夜にまた私の娘や宮家の女性たち面々が皆、説法の道場へ行った。私や宮家の男どもは聞きに行かなかった。冷泉正永は京都へ帰っていった。

大光明寺住職文鼎が引退する

さて大光明寺長老の文鼎和尚は、明日突然、お寺から退出するという。宮家へお別れの挨拶をしに来た。真如寺の塔頭である正脉庵へ移り住むそうだ。この五年間、住職を勤めてくれた。その名残が少なからずある。大光明寺の新しい住職は南禅寺から赴任してくるそうだ。

今出川家の混乱

十三日、晴。今出川家へ行光入道を使者として派遣した。今出川公富新大納言逝去のお見舞いをさせた。行光は夕方に帰ってきた。それによると、今出川家では皆、呆然とした状態で、家の相続人をどうしたらよいか途方に暮れているそうだ。養子にふさわしい人を捜しているが、いずれにしても將軍のご意向次第なので、どうなるか分からない。今出川公行前左大臣の未亡人である近衛禪尼と家司の重徳・田村入道の三人で、家政のすべてを相談して取り決めているそうだ。

さて田向経良が参議に昇進したお祝いとして、一献の祝宴を挙行了た。「特別にお祝いいただき、恐れ多くもありがたいことです」と経良は申していた。

称光天皇、後小松上皇御所へ行幸する

ところで今日、称光天皇陛下が仙洞御所へお出ましになった。しばらくの間、ご滞在になるそうだ。近衛房嗣が右大将になったので、そのお礼を陛下に申し上げたそうだ。

陛下にお供した公卿

近衛房嗣権大納言兼右大将、正親町実秀権大納言・徳大寺実盛中納言・武者小路隆光新中納言・中院通淳参議兼近衛中将・行光朝臣
少納言は清原宗業真人、弁は葉室宗豊朝臣
左近衛府、飛鳥井雅清朝臣・四条隆盛朝臣・松木宗継朝臣・白川雅兼朝臣・一条公知
右近衛府、山科教豊朝臣・河鰭実村朝臣・八条公興朝臣

右衛門府、西洞院時基朝臣

藏人、中山定親朝臣・葉室宗豊朝臣・甘露寺房長・坊城俊国・慈光寺持経・岡崎範景

内裏へお戻りになるのは二十一日、上皇御所で舞をご覧になるのは十九日だそうだ。

十四日、晴。明日は石清水八幡宮放生会である。田向経良新参議と田向長資朝臣は放生会に出仕するので、今日の夕方から石清水八幡宮へ向かった。庭田重有朝臣・世尊寺行豊朝臣も同じく向かった。

畠山満家が新しく室町幕府管領となる

ところで細川満元が室町幕府管領を辞職した。後継として畠山満家右衛門佐入道が任命された。

十五日、晴。石清水八幡宮放生会、実施最高責任者の公卿は勧修寺経興中納言である。勧修寺は去る十二日に中納言就任の挨拶を済ませたばかりで、また検非違使別当の役は辞退している。参議は田向経良新参議、弁は広橋宣光朝臣、警備責任者は田向長資朝臣である。

夕方、田向新参議以下が帰ってきた。御神輿の巡行はすべて無事に終わったと話していた。田向新参議親子がともに無事出仕したのは、めでたいことである。

寿藏主が来て、一献ほどの酒宴を準備してくれた。今夜は名月なので、いつものように月を愛でた。しかし人がいないので、名月を和歌に詠むことはできなかった。

田向経良、参議昇任お礼の舞踏

十六日、小雨が降った。今夜、田向経良新参議が昇任お礼の舞踏をする。石清水八幡宮神事以前にお礼の舞踏をすべきだったが、忙しくて延び延びになってしまった。ただし神事に随行した翌日に昇任お礼の舞踏をした先例はあるそうだ。

昇任お礼の舞踏、行列に付き従ったのは侍の広輔一人、糊をきかせた

白い狩衣を着た雑役夫一人、若い雑役夫六人だそうだった。田向家としては参議への昇進は先代で中絶していたから、この経良の昇進で家門が再興されたことは、幸運の至りであり、めでたいことだ。

さて土倉の宝泉にお茶菓子やお茶一種類を差入れした。学問僧月庭の慰労のためである。特に恐れ多くありがたいことですよとの返答があった。

法華經寿量品の説法

夜、月庭の説法を聞きに行った。椎野寺主・私の娘のあ五々・東御方・廊御方・兄の妻であつた上臈・今参・重有・長資ら朝臣を連れて行った。法華經寿量品の説法は素晴らしかった。

石清水八幡宮へ代参の者を送る

十七日、雨が降った。石清水八幡宮へお参りしたいと思っていたが、忙しくて実現できないので、今日、代理の者に参詣させた。一字写すのに三回拝礼しながら写経した般若心経一巻と願書、それに奉納品を少し、神に献上した。特別な願い事があつたのである。

月庭の法華經説法を聞きに行った。椎野寺主・宮家の女性たち・重有朝臣以下も聞きに行った。

田向経良新参議が京都から帰ってきた。前夜の昇任お礼の舞踏が無事終わったと話してくれた。天皇陛下と上皇様が一つ所にいらっしゃったので、二回舞踏したそうだった。取り次ぎ役は、六位蔵人極臈の慈光寺持経で。陣の座の下、持経の宿所から舞踏の場に出たという。

灯籠供養の相撲

十八日、晴。今夜、田向家で相撲があつた。村人たちが集まったそうだった。この相撲は、灯籠供養のためだという。

舞御覧

十九日、晴。今日は上皇御所での舞御覧である。舞楽の目録が数日前から提示されていた。ところがまた当日になって曲目が差し替えられたそうだった。数日前は、河南浦・胡徳楽が目録にあつた。しかし興福寺の寺侍が

死去したために、この二曲は省略されたそうだった。

入場曲・万秋楽・振舞・左右万歳楽・地久・皇帝・古鳥蘇・賀殿・長保楽・胡飲酒・新靺鞨・還城楽・綾切・青海波・白浜・三台・皇仁・抜頭・八仙・太平楽・狛杵・陵王・落躑・退出曲・夜半楽
今夜も月庭の説法を聞きに行った。私の娘・東御方・廊御方・妻の二条・今参・田向新参議・重有朝臣・長資朝臣らも行った。

二十日、晴。お彼岸の初日なので、身を浄めた。説法を聞きに行った。椎野寺主・二人の尼局・田向新参議以下、寿蔵主らも行った。その後、少し酒を飲んだ。

二十一日、晴。今夜は、天皇陛下が内裏へお戻りになる日である。その行列にお供する者たちの名簿を見ていない。

豊原郷秋が、舞御覧の曲目一覧を持ってきた。対面せず、すぐに戻っていった。

説法を聞きに行った。宮家の女性たちや田向新参議以下も聞きに行った。学問僧の月庭は今朝、田向家へ招かれたそうだった。宮家からも茶菓子やお茶三種類を月庭へ贈った。恐れ多くもうれいですよとの返事が来た。

法華經普門品の説法

二十二日、晴。お彼岸の期間中は、仏教と縁を結ぶため、毎日、月庭の説法を聞きに行っている。宮家の女性たちや男ども、それに寿蔵主も聞きに行った。夜にもまた聞きに行った。宮家の女性たちや男どもも皆行った。法華經普門品の説法はとて有難く涙がこぼれ出た。椎野寺主は自分の寺へ帰った。

二十三日、晴。お彼岸の中日なので、いつものように身を浄めた。説法を聞きに行った。夜にもまた聞きに行った。宮家の女性たちや田向新参議以下、皆が昨日と同様に行った。夜の説法は今夜限りだそうだった。明後日は、法華經説法の最終日である。

二十四日、晴。説法を聞きに行った。例のように、宮家の女性たちや田向新参議以下も同様である。まず説法以前に一献の酒宴があった。塔頭御寮恵芳・惣得庵主・山田香雲庵主ら大勢が同席していた。酒宴が終わって説法となった。説法がはじまって二時間ほどして、私は宮家へ帰った。

父母恩重經

その後、施餓鬼があつたそう。宮家の女性たちはそのまま参列していたという。夜には父母恩重經が説かれたそう。同様に宮家の女性たちは聞きに行った。

今出川家の領地はすべて他家に移される

さて今出川家の遺産継承の件であるが、聞くところによるとその遺産のうち左馬寮領は、洞院満季と正親町実秀兩人へ上皇様がお与えになつたそう。それ以外の今出川家領もすべて他家へ移されたという。今出川家はすでに事実上滅亡しており、致し方ないことであろう。これを神罰というべきであろうか。とは言うものの、神様の思し召しがいかなるものなのか、よく分からない。

今出川家の養子として、西園寺実永の末子が望まれているそう。しかし今となつては養子をとるのも無益なことではなからうか。

今出川家のありさまに、とても驚き嘆き悲しんだ。

月庭法華經説法の最終日

二十五日、晴。月庭の説法も今日が最終日である。説法を聞きに行った。二人の尼局・田向新参議・重有朝臣・長資朝臣・塔頭比丘尼たち・惣得庵主・山田香雲庵主ら・二人の女官など、大勢が聞きに来た。聴衆も大勢、群れ集まつた。

法華經の説法が終わってから焼香した。次にお経を音読した。音読には比丘尼たち五、六人も加わつた。このお経音読は、宝泉の亡母七回忌の法要だそう。それが終わって、宮家へ帰った。

その後、宮家で学問僧と対面した。月庭に絹織物の練貫一反と杉原紙

十帖を与えた。月庭はすぐに出ていった。

先月二十三日より今日まで三十三日間、昼夜の説法が無事終了した。私はその内二十二回、聞きに行った。宮家の女性たちは昼も夜も大概、聞きに行かれていた。説法は私が望むような場所で行われなかったけれども、すべては仏法と縁を結ぶために説法を聞いたのである。この程度ではきつと、批判されるだろうなあ。

二十六日、晴。お彼岸の最終日である。いつものように身を浄めた。

行光入道の妻が妙見の託宣を口走る

ところで今日、行光入道の妻が突然氣を失つた。その後、氣が狂つたように、いろいろと口走つたそう。それは妙見の御託宣だという。「妙見社の木などを近年切つた。そのため社頭が荒れ果てたことが神様の思し召しに背いている」などと、いろいろと託宣しづらい。巫女がいろいろと宥めたら、狂氣から覚めたそう。不思議なことである。今後は妙見の社の神木を切るべきではないだろう。

二十七日、晴。田向経良参議が京へ出かけた。今出川家へ行かせたのである。今出川家の遺産について聞かためだ。夜に帰ってきて、今出川家の状況について話してくれた。

琵琶「白玉」と増鏡などの草子を今出川家から取り戻す

今出川家の領地をすべて報告するように室町殿から命じられたので、すぐに報告した。そしてすべての領地に別の領主をお付けになった。ただし西園寺の子息を養子に迎える件については問題はなからうと室町殿は仰つたそう。このことだけが将来の頼みの綱であるという。今出川家で残された二、三人の男女が茫然自失した状態のようだと田向は言っていた。かわいそうで、どうしようもないことである。田向は、日頃、宮家が今出川家に預けておいた白玉という銘のある琵琶一面と真寸鏡（※）以下の草子などを取り戻してきた。

名笛「空蟬」

ところで空蟬という銘のある笛は、今出川家相伝の名宝である。これを後小松上皇様が接収なさって、洞院家にお下しになったそうだ。すべてが無情なお取り計らいである。故今出川公行前左大臣が特に最近は一生涯命上皇様へお仕えしていたのに、彼の死後にこのような恥辱をお与えになるとは、上皇様のお考えはとてでもないが理解できない。それもこれもすべてが今出川家滅亡の時節が到来したせいなのであろうか。しかたがないことである。

芝敷地の件が解決する

また綾小路信俊前参議のところへも、田向を行かせた。芝俊阿の屋敷地のことである。この秋には俊阿がこの土地から立ち退くよう、堅く決定されていた。ところが俊阿が田向と一緒に一献を持参してきて、立ち退きを免除してほしいと綾小路に申し入れてきたので、許してやったそうだ。このことは、私が領主として命じたため、今春、理不尽にも綾小路前参議から申し入れさせたためだという。いづれにしても解決して、公私ともにめでたいことである。

大光明寺大通院の建立が決まる

さて大光明寺に大通院という御塔頭を建立することは、父の御遺書に記されている通りである。ところが大光明寺は今まで大通院を造営していない。そこで用健と鹿苑院主がご相談になった結果、去る十九日に室町殿へお伺いを立てた。その結果、室町殿からは問題がないというご返答があった。大光明寺の新しい住職が就任した後に建立したらどうかと、室町殿は仰せになられたそうだ。ご丁寧なお話で、うれしいことである。

播磨国石見郷

新住職は、南禅寺の前住職大椿周亭和尚である。来月の初めに就任なさるそうだ。播磨国石見郷は大通院のための領地である。ご生前の折、

御遺書に「この石見郷を大光明寺に寄付する。私が亡くなった後にこの寄付を執行しなさい。とりわけ大光明寺に御塔頭一字を建立しなさい」と書き置かれた。しかし大光明寺はこの石見郷を支配しながらも、御塔頭を造営してこなかった。これは、父のかねてからの願いに背くものである。それで用健が内々に鹿苑院主と話し合ったところ、急速に話がまとまったのである。これですべて父の願い通りに事が叶うわけであり、めでたいことだ。

夕方に酒を飲んだ。小川禅啓が用意してくれたのである。

※真寸鏡：増鏡のことであろう。

伏見宮家の南庭で盗みに関する落書が見つかる

三十日、晴。御所の南庭に落書があった。これを見付けて開いてみたら、盗人のことが書かれていた。去る夏の頃、御所中や田向家などで物が無くなったことがあった。この落書には、それらを盗んだ嫌疑がある人の名前が書いてあった。そして、その者が当番役を勤めている時にまた物が盗まれるはずだとも記されている。つまらない話で、取るに足らない。この落書は、宮家以外の方が書いたものではなからう。

(続)